

南方氣象豫報資料 第五輯

比律賓群島近東西太平洋に發生する颱風と 低氣壓の發生機構

マニラ氣象臺次長 チャールズ・イー・デッベルマン原著

臺北帝國大學助教授 小笠原和夫 解説

I. 緒 言

著者は嚮に發表した論文「支那海に發生する颱風」⁽¹⁾に於て、支那海に於ける颱風の發生條件を論じたが、其の結果を見れば暴風は決して、一樣な氣塊内で發生するものではなくして總て二つ若ば三つの氣塊の間の不連續線の沿線に發生してゐることが知れ、尙其の上支那海には颱風發生に特に適してゐる數箇所の場所があることも知れた。

又此の研究の結果、少く共大多數の颱風發生には氣流の收斂運動若は山岳への「押込み」作用が原因となつてゐることも判明した。

本研究に於ては北縁は略北緯 20° に、南及東はマリアナ、カロリン群島及小笠原諸島に、又西縁は比律賓群島に境する領域内に發生する颱風若は低氣壓に就て同様な調査研究を試みた。この領域は大體比律賓群島の東方約 700 哩以内に當る。此の領域に於ける觀測資料は、船上及陸上の觀測所を合せて勿論支那海に於ける資料の如く豊富ではないが、豫備的創始的な研究としては充分だらうと思はれる。それに研究が進むにつれて、此等の暴風は決して無法則的なものではなくして天然的に法則ある一群を成してゐることが分つた。茲に甚だ遺憾なことではあるが、恐らく最も重要な颱風であらうと思はれるマリアナ及びカロリン群島の南方及東方に發生する颱風資料が、正確な判斷を下すに必要な丈充分には得られない爲、此の地域に關する研究を割愛せねばならない。併し本研究の結果により、比島近東に發生する颱風の發生機構上南半球からの無偏向貿易風が極めて重要な役割を演ずることが甚だ多いといふことが明かになつた。

本研究に於ては、颱風の發生場所に關し、不正確にして未解決の疑問が存する場合は嚴に之を除外した。又波動若は發生初期の小暴風にして、東方或は南東方向から赤道前線若は赤道地帶を横切つて進んだものは一つもなかつたといふことを確める爲には特に入念な調査が行はれた。此の點に關しては船舶よりの報告及グアム・ヤップ・バラウ及サイパン等境域地方の觀測所が特に有益であつた。颱風發生の原因に就いて、試案乍ら満足な結論を得やうとするならば、疑問的のものを嚴重に除外してかゝるといふことが絶對的に必要である。但し唯一つ丈例外を認めた。それは 1938 年 1 月 10 日の颱風であるが、之は貿易風—北風型の唯一つの實例であり、本研究にはどうしても入るべきである上、尙たとへその發生地が既に決めた區域を多少越へて東方にあつたとしても、其の構造、特性、發生推定様式を示したかつたので、敢て之を取り上げた次第である。